

# 日本語学習者に対するオンライン読解授業の実践事例 — 初中級レベルの日本語学習者を対象に —

早川 杏子

DOI: 10.18999/stul.34.65

## 1. はじめに

新学期が近い 2020 年3月ごろから、日本においても新型コロナウイルス感染が拡大し始めた。特に、東京都では日に日に感染者数も増大して行き、マスクの着用や、3密<sup>1</sup>を避け、人との距離を一定程度に保つ、いわゆるソーシャル・ディスタンスを取ることが推奨された。いよいよ新学期を迎える直前の3月末、多くの大学が3密になりやすい教室対面型の授業の中止を決める中、筆者の所属する一橋大学でも感染拡大の防止を考慮して、すべての授業を対象に対面型からオンラインによる遠隔授業への移行を決定した。同時に、外国人留学生に対する日本語教育を行う国際教育交流センターでは、4月の入国を予定していた学生が入国制限措置で渡日できなくなったことにより、急遽オンラインによるレベル分けの実施やスケジュール調整、オンライン授業に向けたガイダンスなど、新学期の体制整備の対応に追われることとなった。国際教育交流センターが提供する日本語科目もすべてオンライン授業の対象となったが、入学予定者や一時帰国した留学生など、来日を果たせぬまま新学期を迎えた留学生は日本国外からリモートで参加し、何とか学期がスタートした。

本稿で紹介する「Intermediate Japanese Reading I」は、国際教育交流センターで提供している留学生対象の日本語読解クラスである。例年、105 分授業、14 週間の開講スケジュールであるが、今年度は春夏学期の開始が1ヶ月後ろ倒しとなり、5月初旬からの 10 週間となった。期間が圧縮されたことにより、これまで授業内で行ってきた内容を、授業外での学

---

<sup>1</sup> 厚生労働省により、3つの「密」、すなわち1.密閉空間(換気の悪い密閉空間である)、2.密集場所(多くの人々が密集している)、3.密接場面(互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や発声が行われる)の3密を避けるよう、呼びかけが行われた。

習や課題で補いながら、双方向でのオンライン授業の中でしっかり深い理解につなげていくことが要請された。

これまで、他の日本語クラスと同様に、読解の授業では教室での対面授業が中心で、非対面のオンライン授業は初めての試みであった。今回、未曾有の新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、密集環境になりやすい教室での対面授業がかなわなくなり、きわめて短期間でオンライン向けの授業デザインを組まざるを得ない状況となった。当初は不安から始まったオンライン授業であったが、実際に実践を重ねていくと、工夫次第で円滑な運営が可能になること、それまで教室での対面授業では強く意識していなかった点に気付くなどの学びがあった。そこで本稿では、10 週にわたるオンライン読解授業の内容と実践を紹介し、初めて学期を通じて行ったオンライン授業から得た学びと課題を報告する。

## 2. オンライン読解授業の概要

### 2.1 概要

本稿で紹介する日本語読解クラスは、「Intermediate Japanese Reading I」(以下、IJ-1 Reading)である。このクラスは、初級<sup>2</sup>が終わったすぐ後のレベル、いわゆる初中級段階の日本語能力を持つ学生を対象にした読解クラスである。本授業は、2020 年5月初旬から 7 月下旬までの 10 週間(週一回、全 10 回)であった。本授業に参加した学生は、2019 年9月に来日し、初級後半の日本語コースを修了した交換留学生5名であった。そのうち2名は欠席が続き、通常3名が授業に参加した。参加した学生は、全員が非漢字圏の学習者(ヨーロッパ出身者2名、東南アジア出身者1名)であった。

### 2.2 オンライン授業で使用したツール

本学では、全学的な授業のオンライン化に伴い、3つの授業形態への対応が求められた。1つ目は、非同期型のオンデマンド配信、2つ目は同期型のライブ配信、3つ目は同期型と非同期型を組み合わせたハイブリッド型の授業である。留学生を対象とした日本語科目は、講義のように知識伝達を目的とし、情報の発信が一方向であっても成立するタイプの授業ではなく、教師と学生の双方向的なやり取りの中で学習や習得が進んでいくと考えられるタ

---

<sup>2</sup> 初級は初級前、後の2つのレベルに分かれており、使用教科書はそれぞれ『げんき』1、2であった。

IPの授業であることから、2つ目の同期型ライブ配信授業の形態を採用することとなった。授業の配信には、オンライン会議システムの zoom を使用した。

オンライン授業の実施にあたっては、授業配信のためのツールを導入するだけでなく、学習環境の整備も急務であった。例えば、これまでコピーや印刷で対応してきた授業資料の配布や、宿題の回収などの問題である。対面で行ってきた教材配布や課題管理が物理的に困難になったことにより、オンライン授業では、ウェブ上でこれらが管理できる、学習管理システム(Learning Management System、以下 LMS)の活用が不可欠となった。この LMS にも、授業に応じていくつかの選択肢が全学的に提案された。一つは、全面的なオンライン授業化に移行する以前から、授業の円滑な運営と学習支援のため、本学で LMS として採用していたクラウド型教育支援サービス「manaba」(株式会社朝日ネット)である。もう一つは、米 Google 社の提供する Google Classroom である。Google Classroom は G Suite for Education のサービスの一つであり、映像配信のような容量の大きな教材配布にも対応可能なばかりでなく、大学で発行している学生・教員の G メールアドレスとの紐づけも容易で、授業に登録されたメンバーに、課題等に関するお知らせなどが自動的に通知されるなどの使いやすさが魅力である。ただし、国によっては Google のサービスが全般的に使用できない可能性もあるため、交換留学生を対象とする授業では、この点が最も大きな懸念材料であった。また、本学ではウェブシラバスや履修登録、成績登録などの別の管理システムと連携しているのは manaba であり、Google Classroom はそうしたシステム間連携がないため、



図1 学習管理システム manaba のインターフェイス

本センターでも専ら manaba を利用していたという経緯があった。そのため、前学期から一橋大学の授業を受けていた交換留学生にとっては、manaba のほうが使用に対する親和性が高く、地域による制約も受けないことから、本授業では、教材の配布、課題の提出、内容確認テストなど授業運営に関わる教材や提出物の管理は、manaba を介して行うことにした。なお、今回の全学的な授業オンライン化に伴い、サーバーの負荷軽減のため、manaba に一回あたりの使用容量制限が設けられることとなったが、本授業では映像のような容量の大きな教材を使用する予定はなく、この点も問題なかった。

## 2.3 授業デザイン

読解授業のデザインは、さまざまな観点からデザインすることが可能である。トピック、ジャンル、説明文・物語文などテキストの特徴別、もしくは語彙拡張、読解ストラテジー技能の習得などの目的別による設計などが挙げられるが、本実践では、初級を終えたばかりの初中級の学習者が、第一に、読みにおいて、正確な理解につながるポイントに注意を向けられるようになること、第二に、テキストに応じた読み方ができるようになること、第三に、多くの文章に触れることを目標とし、デザインした。

第一の目的である「正確な理解につながるポイント」とは、一言でいうと、言語情報処理において、しばしば問題として挙げられる事項で、日本語学、言語学、心理学など複数領域にわたって多く議論が行われてきたものである。例えば、文体差やモダリティ表現(例: ~はずだ、~べきだ)、無主語文、視点の問題などである。第二の目的である「テキストに応じた読み方」とは、第二言語習得研究において関心の高い読解ストラテジーに関する事項である。例えば、掲示板の中から自分に必要な情報を探すといったような探し読み(スキミング)などである。第三の目的である「多くの文章に触れること」とは、いわゆる多読の機会を提供することで、多読による付随的語彙学習(incidental vocabulary learning)を期待する活動であった。これは、NHK が日本の新聞記事を外国人や児童向けにやさしい日本語で書き換えた、ウェブ版のニュース記事「NEWS WEB EASY やさしい日本語ニュース」(<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>)を一つ選んで読み、要約を書くというものであった。

各回の基本的な流れは、次の通りである。初回を除き、予習をベースに進めた。具体的には、次回に扱う読解教材と内容理解を問う問題を事前に配布しておき、学生は指定日までに manaba に内容理解問題に解答を書き込んだファイルを提出する。教師は、当日まで

に受講者の解答を確認しておき、読み誤りが生じている部分を把握しておく。授業では、各回に設定された、読解における重要なポイント(表1参照)を中心に学んだ後、対象の読解教材を一文ずつ読み合わせながら、語義や文意理解の確認を行った。そして、内容理解

表1 本実践の読解授業シラバス

回	テーマ/ポイント	学習内容	題材
1	文章のタイプと文体 文体の違いと文脈の関係理解	いろいろな文体がある ことを知る	小学生新聞のコラム、夕刊記事、新書、メール文
2	必要な情報の読み取り(1) 情報の探し読み(スキヤニング)	身の周りにあるものから 必要な情報を得る	掲示板のお知らせ、 就職活動のメール文
3	必要な情報の読み取り(2) 大意把握(スキミング)と情報整理	必要な情報を見つけ て、整理する	生活費のやりくりに 関する相談とアドバイス
4	変化を表す文章 アспект「タ・テイタ」の時間軸の理解	時間とものごとの変化を 表す文章を読む	江戸時代の生活に 関する説明文
5	文の主語をつかむ 無主語の把握	見えない主語を見つ け、「誰が」に注意して 読む	ハンディキャップと 仕事に関するエッセイ
6	意見を読み取る 認識・価値判断のモダリティの理解	筆者の意見を読み取る	突然死に関する投書
7	視点に関する文章(1) 主述の一致による主語把握	敬語をヒントに、人物関 係をつかむ	レストランと客の会話で 構成される物語文
8	視点に関する文章(2) ヴォイス(受身・使役)の理解と主語の 把握	語り手の視点と「誰が何 をしたか」を正確に読み 取る	ユダヤ難民へのビザを 発給した外交官のバイオ グラフィー
9	指示詞と照応関係を理解する 文章内の指示詞と照応関係の理解	「こそあ」が何を示して いるかつかむ	子どもの頃の思い出の 回想文
10	データの説明を理解する 比較文や数値に関する表現の理解	データを正確に読み取 る	日本の少子化問題に 関する研究発表の原稿

注: 「テーマ/目的」の列は、上段が「テーマ」、下段が「ポイント」を示す。

に関する問題の答えを確認し、読み誤りや注意すべきポイントについて解説・フィードバックを行った。授業終了後、受講者は次回の授業までに、manaba を介して内容理解確認のためのクイズに答え、提出することとした。内容理解のクイズは、受講者が提出した後、manaba の自動採点機能によって、得点と正答がフィードバックされた。

初回と2回目を除き、一回あたりに読む読解教材は基本的には一つで、短い文章では 200 字程度、長い文章では 1,500 字程度の長さのものであった。読解教材の題材は、メール文、掲示板の案内文、新聞のコラムや投書、エッセイ、物語文、説明文、口頭発表の原稿など、幅広く扱った。取り扱った文章は、語彙・文法・表現などの面で、ある程度調整されたものであった。語彙に関しては、難易度の調整はあったものの、受講者にとって未知語を多く含む文章がほとんどであった。しかし、事前に授業で取り扱う文章を読んできるといふ、予習をベースとした授業デザインにしたため、実際の授業では未知語によって読みの理解が妨げられるといったような問題はあまり生じなかった。予習の際は、最初は辞書を使わずに読むようにし、2回目に読む時には辞書を使用して読んで良いと指示した。

なお、評価に関しては、今回は授業回数が通常よりも少なくなったことを鑑み、授業の機会を保持するためにテストは実施せず、課題やクイズなどの平常点により評価を行った。

### 3. 授業の運営

II-1 Reading の授業においては、まず、その日の学習テーマとポイントについて説明した後、対象の文章を読み、文章中の学習したポイント部分が正確に理解できたかどうかを確認した。次に、全体を読み終わった後、受講者が予め回答した内容理解の質問に対する確認を行った。理解確認は、文章中の漢字の読み方、語義の確認、同義・類義への言い換えのような言語面と、文章に書かれている記述に関する内容面について、随時学生に口頭で質問し、応答に対してフィードバックするという方法で行った。理解確認の際は、読解教材や予習課題のファイル、補助資料などを zoom の共有画面に映しながら進めた。読解の授業ではよく、対象の読解教材を一文ずつ学生に読んでもらう際、学生がどこを読むか分からず迷う場面に遭遇することがあるが、今回はそのような時、ファイル上でポインタやマーカー機能などを使えば読む場所を直接示すことができたため、学生もすぐに対象の文に視線を戻すことができた。これは大きなメリットであった。

なお、オンラインでは板書ができないので、代わりにzoomのチャット機能やファイルに直接書き込むという方法で対応した。zoomには、「ホワイトボード」という機能があり、参加者が白板のような空間に文字などを書き込めるようになっている。しかし、これを使うと、書き込みと教材の画面が同時に見られなくなってしまい、フィードバックが難しい。また、学生がzoomの操作にまだ慣れておらず、別の授業でうまく使えずに、時間をロスした事例もあったため、本授業には使用しなかった。授業の運営上は、チャット機能やファイルへの書き込みによる方法だけでも特に問題はなかったが、板書に代わるフィードバックの方法に関しては、後述するように、検討の余地があると考えられる。

読解のための資料や課題、クイズなどは、manaba上で管理した。課題は、教師が授業日までに学生の解答傾向のチェックを確実に行うことができるよう、提出には期限を設けた。manabaは、課題の公開時に、メールを介して受講者に提出期限のリマインドを送る機能がついており、提出忘れや連絡漏れを防ぐことができる。特に、授業の欠席者に対して課題の再配布や連絡の手間がなく、欠席した受講者自身で次回の授業に対して準備ができるというのは、自律的な学習という点でも非常に良いことである。さらに、manabaには、「小テスト」という機能があり、授業で学習した内容確認のクイズには、この機能を活用した。「小テスト」の採点は、自動もしくは手動かが選べる設定になっており、自動採点の場合は予め正答を指定しておけば、受講者が解答を提出した後に自動で採点し、点数や解答のフィードバックを示してくれる(図2参照)。

問題1. iPS細胞について、適切(てきせつ)なものを1つ選んでください。

- iPS細胞の開発者(かいはいつしゃ)は、ノーベル賞(しょう)を逃(のが)した。
- iPS細胞は、難病(なんびょう)の人を助けられる可能性(かのうせい)を持っている。
- iPS細胞ができる前、パーキンソン病はリハビリで治(なお)すしかなかった。
- iPS細胞の研究は、完全(かんぜん)に終わった。

○  点

問題2. iPS細胞の開発で、どんな変化(へんか)がありましたか。  
適切(てきせつ)なものを1つ選んでください。

- 臓器(ぞうき)がうまく働(はたら)かない人が減(へ)った。
- 研究者(けんきゅうしゃ)たちは、治(なお)らない病気の薬(くすり)の開発(かいはい)をやめた。
- パーキンソン病の患者(かんじゃ)に希望(きぼう)を与(あた)えた。
- パーキンソン病の治療法(ちりょうほう)が見つかった。

×

合計点 : 4 / 7

図2 内容確認のクイズの例 (manabaによる自動採点)

クイズの受験期間は、授業後から一週間とし、その間はいつでも解答できるように設定した。クイズは、授業の内容の理解確認を目的とし、授業で用いた資料や辞書の使用を認めた。自動採点であれば教員の採点作業の手間が省ける上、これまで授業内でクイズに充てていた時間も授業内容に代えることができ、今後も利用を考えていきたい機能の一つである。

#### 4. 授業外の課題

事前課題として課していた内容理解問題は、3つの構成から成り、①読む前に、②読んだ後で(1回目)、③読んだ後で(2回目)とそれぞれに質問が設けられていた。①「読む前に」では、文章の話題についての背景知識を喚起する問題や、その文章の理解のために重要となる語に関する問題などであった。

1. 読む前に

① 次の国の旗はどれですか。a~dの中から、正しいものを1つ選んでください。

(1) ドイツ ( )      (2) リトアニア ( )      (3) ソ連 (ソビエト連邦) ( )  
 (4) チェコ ( )      (5) イスラエル ( )

a     b     c     d     e 

② 次のA~Cの説明に合うことばは、イ~ニのどれですか。答えは1つとは限りません。

A. 外国に関係すること全部を決める政府の機関 ( )  
 B. 外国で自分の国の人を助けたり、ビザを発給したりする場所 ( )  
 C. 外国政府と自分の国の政府とコミュニケーションをとる役割を持つ人 ( )

イ) 大使館      ロ) 外交官      ハ) 外務省      ニ) 領事館

図3 「読む前に」の問題例



例えば、文章の話題についての背景知識を喚起する問題の例では、ハンディキャップと仕事を題材にした文章を読む前に、『『ユニバーサルデザイン』』という考え方を知っていますか。このデザインのいいところは何ですか」と、トップダウン処理を促す問いを設けた。その文章の理解のために重要となる語に関する問題の例では、ある外交官のバイオグラフィーを題材にした文章を読む上で、カタカナ表記による国名と外交に関わる施設や職種などが要点把握の鍵となるため、外来語の音義対応や、関連語の意味が区別できるよう、ボトムアップ処理を促す問いを設けた。図3は、その例である。

次に、②「読んだ後で(1回目)」は、辞書を読まずに答える問題であった。この質問の答えは文章中に明示的に書いてあるもので、テキストベース(Kintsch, 1998)レベルの理解を目指すものである。Kintch(1998)は、読み手のテキスト内容の理解をテキストベースと状況モデルに分け、テキストベースはテキスト自体に関する記憶、すなわち「テキストの学習」、状況モデルはテキストからの知識の獲得、すなわち「テキストからの学習」と説明している。Kintch(1998)によれば、テキストに直接書かれている情報について問う場合はテキストベースの理解を測っており、テキストに含まれた内容を測るのなら、状況モデルを測定していることになるという。また、テキストベースの理解は、内容に対する真偽が決定できるレベルとされる。したがって、ここには以下のように正誤問題を入れた。

- |   |
|---|
| ① [ ○ ・ × ] 18世紀、世界で一番大きい町は江戸ではなくロンドンだった。 |
| ② [ ○ ・ × ] 江戸時代、だいたいの人が字を読むことができた。       |

図4 「読んだ後で(1回目)」の問題例

③「読んだ後で(2回目)」は、辞書を使って読み、答える問題で、多義の語や慣用句が文脈においてどのような意味で使われているかを問う語彙に関する問題を設けた。「日本語非母語話者の読解コーパス」から学習者の辞書使用データを分析したフメリヤク寒川(2019)によれば、学習者は辞書を使用しても、見つかった見出し語に対して、文脈に適切な意味を取れないこともあるという。特に多義語の場合、文脈に照らしてどの意味がふさわしいのか、辞書の複数並ぶ語義の中から特定できない場合がある。そのため、こうした語についてはきちんと授業の中で取り上げるように留意した。「読んだ後で(2回目)」の問題に取り組む時点で、受講者は対象の文章を2回読んでいた。そこで、ここでは、文章全体の内

容は概ね理解できた段階であると仮定し、「テキストの理解」を確認する②「読んだ後で(1回目)」の段階から、「テキストからの学習」(Kintch, 1998)、すなわちテキストからの知識の獲得について問う段階の問題を設けた。具体的には、表層的には書かれていない文章の主旨を問うものや、自分の経験と引き付けて考えたり、その文章を通して考えを深めたりするような問題であった。例えば、日本の少子化を題材にした文章では、「女性が子どもを産むのをあきらめないようにするためには、どうしたらいいと思いますか」という質問を設けたところ、この回の授業では、文章中には挙げられていない少子化対策の事例、女性のキャリア形成と出産のタイミングや家庭とのバランスの難しさなど、活発に議論が交わされ、テキストをきっかけに、日本や世界での少子化問題を理解する契機となった。

- ・女性が子どもを産むのをあきらめないようにするためには、どうしたらいいと思いますか。
- ・どうしてこの人は「初めて、自分がしたことが間違っていなかったと思った」のでしょうか。

図 5 「読んだ後で(2回目)」の問題例

本授業の第三の目的である、多くの文章に触れ、付随的語彙学習を促す機会提供のため、授業外のもう一つの課題として、NHK が外国人や児童向けにニュースをやさしい日本語で書き換えた、ウェブ版のニュース記事「NEWS WEB EASY やさしい日本語ニュース」(以下、NEWS WEB EASY)を読むことを課した。NEWS WEB EASY は、ほぼ毎日、3つのニュースが更新され、日本語能力がそれほど高くない学習者でも、自分で最新の日本事情を知ることができる。本授業では、授業外に NEWS WEB EASY の一週間のニュースの中から1つ興味のある記事を選んで読み、内容を要約するよう指導した。要約は、「いつ」、「どこで」、「誰／何が」、「どうした」を入れ、自分のことばで書くように指示した。NEWS WEB EASY には、漢字のルビを消去する機能や機械による読み上げ機能がついており、記事を読む際に、これらの機能を利用し、方法を変えて二回以上読むよう促した。

この課題で受講者が選んだ記事は、新型コロナウイルスに関するもの、東京オリンピックへの準備、プロ棋士の藤井聡太氏の話など、多岐にわたった。受講者がまとめた要約の日本語表現の誤用に対しては、manaba のコメント機能を活用してフィードバックを行った。

Intermediate Japanese 1 Reading

NEWS WEB EASY	読んだ日: 4月28日
名前: エミリー	記事の更新日 (article update): 4月27日 17時25分
記事タイトル: ウイルスが心配 岐阜市が外国人の相談でテレビ電話を使う	

NEWS WEB EASY やさしい日本語で書いたニュース

ウイルスが心配 岐阜市が外国人の相談でテレビ電話を使う

【宿題のやり方】

- ① ニュースを聞く
- ② ニュースを読む (漢字の読み方あり)
- ③ ニュースを読む (漢字の読み方を消す)
- ④ 普通のニュース (少し難しめ)を読む

① ニュースを聞く

② 岐阜市には約9700人の外国人がいて、岐阜市国際交流協会がいろいろな相談を聞いています。先月までは電話で話したり、来てもらったりしていました。しかし、新しいコロナウイルスが心配なため、インターネット

③ ニュースを読む (漢字の読み方を消す)

岐阜市には約9700人の外国人がいて、岐阜市国際交流協会がいろいろな相談を聞いています。先月までは電話で話したり、来てもらったりしていました。しかし、新しいコロナウイルスが心配なため、インターネット

④ 普通のニュース (少し難しめ)を読む

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、岐阜市では外国人からのさまざまな相談をインターネットのテレビ電話で受け付ける取り組みが行われています。相談を受け付けているのは岐阜市から委託を受けている「岐阜市国際交流協会」です。

図6 NEWS WEB EASY の課題説明

## 5. 授業をふりかえって

### 5.1 教室授業との比較

10週間の初のオンラインでの授業を終えて、授業が開始した当初は不安のほうが大きかったが、次第に各種ツールの操作にも慣れ、想像していた以上にオンラインでも大きな問題なく授業を実施することができた。

教室での授業で行っていた時とまったく違ったことは、今回、LMSを活用したことである。学習者の読むペースは各々異なるため、通常の教室での読解授業でも、予習をベースに進め、事前課題を渡していた。ただ、解答の確認は当日の授業で行っていたため、受講者それぞれの解答傾向や読み誤りを把握することができなかった。今回は、授業前までにLMSに内容確認問題を提出するようにし、教師がそれを確認しておくことで、解説やフィー

ドバックを適切に焦点化することができた。例えば、学生によっては、ファイルに調べた語の意味や対訳語を記入しており、時折辞書から誤った意味を取り出している場合があった。授業内で文意の確認をしたところ、予想通りその学生はよく解釈できていなかったり、漢字語のルビをもとに辞書を引いたものの、その語と似た発音で異なる意味の語を引いてしまい、教師が確認するまで誤った語を引いてしまったことに気が付かなかったこともあった。対面授業では、授業中に机間巡視するようにしても、なかなか学生の手元のメモまでをチェックすることができないことが多い。フメリヤク寒川(2019)の指摘のように、辞書を使用しても、語義や文意の理解は完璧ではないことに、教師は十分留意する必要があると改めて感じた。また、学生の間違いの種類を確認しておいたおかげで、どうフィードバックすれば学生自身が読み誤りに気付くことができるかを考えることができ、おおいに指導の参考になった。ただし、このように丁寧な指導やフィードバックができたのは、少人数であったからこそ可能であったともいえよう。受講人数が多ければ、事前の指導ポイントの把握も難しくなってくるかもしれないので、それに対応した授業設計を考える必要があるだろう。

また、読解の授業では、読み合わせをしたり、解説したり、頻繁に焦点が移り変わるため、教師が今どこについて解説しているか、教師が指定した文の位置がわからなくなってしまう学生がいることがある。しかし、オンラインの授業では、文章を共有画面で示し、指定の場所をポインタやマーカーで指し示すことができるので、すぐに見つけることができ、対象の文を探しているうちに重要なことを聞き漏らしてしまう学生もなくなった。この点は、教師にとっても学生にとっても非常に大きなメリットになった。

一方で、デメリットとしては、円滑なオンライン授業を実現、成立させるためには、教員側の授業準備に大きな負担がかかることが挙げられる。これは読解授業に限ったことではないが、オンライン授業の準備は、通常の教室授業の準備と比べて、1.5~2 倍の負担感がある。また、パソコンやツールの操作にかかるわずかな時間でも、それが授業中に頻繁に生じれば、時間的ロスが積み重なって、提供できる内容や範囲も、通常の対面授業よりも若干短くなってしまう印象がある。

今回のオンラインでの読解授業をふりかえって、ここで得られた気づきは、教室授業にも十分生かすことができると考える。例えば、学生が指定した文の位置がわからず、聞き漏らしてしまうという問題は、教室授業では、パワーポイントや書画ツールで文章をプロジェクタに映し、今どこを焦点としているかを示すような工夫や配慮ができるだろう。また、今回と同様に、LMS で事前に内容理解問題の提出やクイズを行えば、適切なフィードバックや授業

時間の有効な使い方ができるはずである。

## 5.2 学生の反応

授業改善の目的で、本授業に対するアンケートを行ったところ、「この授業を通して読解力が伸びたと思うか?」という問いに対し、「そう思う」「強くそう思う」がそれぞれ 50%ずつであり、肯定的な意見が占めた。自由回答には、「文章には多くの難しい語彙があり、読書は非常に時間がかかったが、たくさんを習えたと思います」(原文)という意見がみられた。また、「NEWS WEB EASY について、日本語の語彙や表現、日本事情の知識を広げるのに役に立ったか」という質問に対しては、「そう思う」「強くそう思う」が同様に 50%ずつで、やはり肯定的に捉えられていたようである。課題のテキストに加え、NEWS WEB EASY の要約の2つを課したので、宿題が多いという感想を持たれるかと思っただが、アンケートの「課題の量は適当だったか」という項目では、「そう思う」が 100%で、読解にしっかり取り組みたい学生にはそうでもなかったようである。今回、筆者の「たくさんさんの文章に触れてほしい、読むことを楽しいと感じてほしい」という願いから、課題の文章の他に、NEWS WEB EASY の要約を課すことにした。授業で扱ったものは教師から与えられた文章であったが、自分で時事ニュースを選んで読むのは、自律的な読みの行動であり、学生にとっても良かったのかも知れない。この課題を通して、学習者がどんなことに興味を持っているかを窺い知れたのと同時に、教員が指定する読解教材のみで学習者の読みへの興味・関心やモチベーションを維持することには一定の限界があることを教師は認識し、学習者の好奇心に触れられるような読書環境を整えることも教師の重要な役割であると感じた。これまでも、日本語能力がまだそれほど高くない留学生は、日本の生のニュースを理解することが難しく、オンタイムで時事的な話題を意外に知らない留学生もいることが気になっていた。特に今学期は、新型コロナウイルス感染拡大のために、外出もはばかられ、外の世界との接触も極端に減ってしまっていた。NEWS WEB EASY は、留学生たちが今住んでいる日本でどんなことが話題となり、どんなことが注目されているのかを知る良き接点となったのではないだろうか。そして何よりも重要だったのは、新型コロナ感染拡大によって不安定な状況下で、日本国外のメディアを介した情報ではなく、自分の日本語を通して、今の自分を取り巻く日本社会の事情を知ることができた、ということが意味を持ったのではないか。新型コロナウイルスの影響でさまざまな制約の下、この活動を通して、正確な情報を自分の手で得ることで、過度に不安に陥らず、交換留学生生活を少しでも楽しめるにはどうしたらよいかを考える機会になってい

たら何よりである。NEWS WEB EASY は、難易度的にも初中級レベルにはちょうどよく、現在の日本の情報を得つつ、付随的語彙学習がかなう活動でもあるので、今後も同活動を続けていくつもりである。

### 5.3 改善点

本授業の実践の改善点としては、学生から次の2点の提案が寄せられた。

1点目は、語の用法練習をより充実させることである。授業では、語義を確認する際には、文脈に適切かどうかということに焦点を当てていたことが多かったが、その語の使用意味範囲については扱っていなかった。しかし、クイズでは文脈で使われている語義が理解できているかどうかを確認するために、語の用法に関する問題を作成しているものがあった。例えば、授業で取り扱った文章中の「事故で臓器を失う」という文で使われた「失う」という語について、選択肢の中から正しいものを一つ選ぶという問題で、①その人は子どもを失って、悲しんだ、②私はさいふを失って、いろいろなところを探した、③初めて来た場所で私は失ってしまったので、人に道を聞いた、という3つ選択肢があり、正答は①であった。英語ではどれも “lost” に置き換えられる文であるが、日本語では③は「迷う」がふさわしく、①と②の用法はやや硬い文脈か、日常的な話題に関する文脈かの使用領域の違いで、辞書の使用だけではなかなか区別がつかないような問題である。読解授業では、対象の文章の理解を中心にすると、なかなかこうした語の用法までは手が回らないことも多いが、読解を通して語彙知識の質的側面を充実させられるよう、努めていきたい。

2点目は、学生の解答の修正をするにあたってのフィードバック方法である。本授業では、内容確認の際、解答や修正部分を教師のファイルに書き込んで共有画面で示していたが、学生からは、google document でファイルを作成し、教師と受講生がファイルを共有できるようにすると答えがきちんと確認できるため、便利であるという提案があった。これはツールの使用制約を伴わない限りは非常に良い方法で、すぐに対応できる改善方法でもあり、次回にはこのような方法で実践しようと考えている。

## 6. おわりに

2020 年春、新型コロナウイルスの急速な広がりにより、多くの大学がオンラインによる授業配信を決定した。多くの教師と学生が、遠隔授業の経験が不足している中、非常に短い

間でオンライン授業に対応することとなった。筆者もまた、今回が初めての遠隔授業であり、不安を感じながら開始したが、10週にわたる取り組みを通して、最初の不安はすっかり解消したばかりか、オンライン授業におけるメリットを教室での対面授業の改善に生かせる可能性を感じることとなり、非常に良い経験になった。

紙幅の関係で詳しくは述べられなかったが、今回読解授業で扱ったテーマ・ポイントの中には、読みの過程で重要なポイントであるにもかかわらず、多くの日本語読解教材ではあまり触れられていないものもあり、学習者はその重要性に気付かずに読み飛ばしたり、読み誤ったりすることが多くあった。例えば、今回第5回で扱った無主語文などは、説明を尽くしたとしても、学習者は文章の中で「誰が」「何をした」のかの把握をすることが難しいということを強く感じた。また、第7回で扱った、敬語が使われている文も主語が明示されることが多くなく、述語文の敬語を手がかりに動作主を特定しなければならない。初級を終えたばかりの初中級学習者にとっては、尊敬語と謙譲語の知識が定着しきれていないこともあり、敬語を含む文章も主語が誰かをつかむことがやはり難しい。これについては、また稿を改めて論じることとしたい。

2020年秋現在、いまだ新型コロナウイルス感染拡大は収まる気配を見せず、後期もオンライン授業を継続するところも少なくない。今でも多くの教員が苦心しながら授業設計されていることと思う。拙い実践事例ではあるが、良くも悪くも、本授業実践の報告が少しでもオンライン授業を設計される方々の参考になれば幸いである。

最後に、この授業に参加し、教師の慣れないオンライン授業にも寛容的に対し、授業の改善のために非常に有益な提案をしてくれた学生たちに、心より感謝したい。

#### [参考文献]

- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『げんき1』(第2版) The Japan Times
- フメリヤク寒川クリスティナ (2019) 『『日本語非母語話者の読解コーパス』から見える非漢字圏日本語学習者の辞書使用』『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4, 351-358.
- Kintsch, W. (1998) Comprehension: a paradigm for cognition. New York: Cambridge University Press.

[引用ツール]

株式会社朝日ネット 教育支援サービス manaba <https://manaba.jp/>

Google Classroom [https://edu.google.com/intl/ja/products/classroom/?modal\\_active=none](https://edu.google.com/intl/ja/products/classroom/?modal_active=none)

NEWS WEB EASY やさしい日本語で書いたニュース(NHK)

<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>

Zoom Video Communications <https://zoom.us/>